

白山ふるさと文学賞

第十回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生1・2年小説の部 最優秀賞

のびたラーメン

東明小学校二年

前川 まえかわ

葵 あおい

ここは、高きゆうラーメン「かみ川」。まちのはずれにあるんだよ。えきから歩いて五十分!!でも、おきやくさんがいっぱいくるんだ。おみせの中はとってもきれいで、子どものすわるスペースもあって、子どもメニューにはアイスとゼリーとおもちやがついてきて、かぞくでくる人も多い。

店長は女子であまいものが大すき。ちよつと男の子の言ばをつかう。大ぐいたいけつの日本大会で一位になったすごい人なんだ。大ぐいがつよくて、ラーメンを作るのが上手だから、みんなにプロって言われてる。ラーメンは、つかれた人がたべると、体がポカポカになって、安心してつかれがとんでくから、みんなが元気になるラーメンをつくりたいと思つて、ラーメンやさんになった。

そして、ぼくちゃんは、プロのきせつのこだわりとんこつラーメン。プロが、あさ四じにおきて、しこみをしているんだ。ざいりようは、北海道のとんこつと、日本中からきせつにあわせて見つけた、おいしいやさいをつかっているんだ。めんは、石川けんの小むぎこをつかつて、プロが自分しんでがんばつてつくっている。

「ぼくちゃん、おきやくさんに、早くたべてほしい。」

ラーメンがきれいな人も、一口ですぐすきになるくらい大人気のラーメン!!

午前十一時

「今からおみせがひらきます。」

とプロのアナウンスが入ると、ならんでいた二十人くらいのおきやくさんがいっせいに、みせに入ってきた。するとプロは、「いそがしいわ。」と言つてすぐによりようりはじめた。アルバイトの、ミナさんとトモヨシさんとリクさんもみんなやさしいえがおで、「こちらのせきにどうぞ。」や「ごちゆうもんは?」と言っている。たくさんのラーメンたちがズル

ズルとすばやく人間のおなかの中に入つていく。なのにぼくちゃんは、なかなかりようりきれない。

そして、よる八時。ついにぼくちゃんをたべる人がきまつたんだ。黒いぼうしをかぶつて、黒いサングラスをして、にじ色のマスクをして、ほしのマークのふくをきた男の人だ。よるにサングラスをかけるから、サングラス男とよぼう。

「うわあ!たべられてうれいなあ。」

ぼくちゃんは、どきどきした。でも、そこに、「テュルルル・テュルルル・。」と、でんわがかかつてきた。それは、サングラス男のしん友だ。二人は、ペチャクチャと、だいじな話じやないことをずつと話していた。

「あゝあ、はやくたべてくれないかなあ。体がのびちやう。」

サングラス男は、それでもやつぱりでんわをやめない。サングラス男は、とつてもたのしそう。でも、ぼくちゃんは、ぜんぜんだのしくない。

「やわらかすぎると、あゝいやだなあ。のびて、バブちゃんようくらいにやわらかくなつちやう。だいじな話じやないなら、早くきつてくれよ!」

しばらくして、でんわがきれた。

「ふう、やつとたべてくれるなあ、うれいなあ。」

サングラス男は、ぼくちゃんを見て、

「あゝ!プロのこだわりラーメンがのびちやつた!!」

と、がっかりした。

「えゝ!ぼくちゃんつて、やつぱりのびちやつてるの?!ガーン!」

と、ぼくちゃんもがっかりした。そして、サングラス男は、

「いただきます。」

と言つてぼくちゃんをたべはじめた。

「まずい。」

と、言われるとぼくちゃんは思った。でもサン格拉斯男は、

「あれ、なんかむかしのきゅうしよくのラーメンみたいなあじがするなあ。おれ、きゅうしよくのびたラーメン大すきで、ラーメンの日は、まい日いっぱいおかわりしてたんだよなあ。」と、なつかしそうに言った。それをきいて、ぼくちゃんは、ほっとした。そして、サン格拉斯男はうれしそうにのびたラーメンをぜんぶ食べた。

さつきまで、のびるのがめっちゃいやだったけど、もし、またぼくちゃんが、ラーメンになったら、たまにはのびたラーメンになってもいいかなって思った。

